

### 三十四、未曾慢恣愍傷衆生

本部の大經講座において私は、「未だ曾て慢恣まんしせず、衆生を愍傷みんじょうす」という聖句の前に、足止めを食つて、昨夜をまたも蒸し返して、これだけで一夜を費した。深く深く考えさせられたからである。これは大經の会座の成立において、菩薩の徳を、世尊の八相成道によつて示され、その帰結を略讚せられる文の、さらにその最後の言である。

菩薩は、「未だ曾て、僣慢にして、自ら縦恣にせず。大悲の心をもつて衆生をあはれみいたむ。」と言われるのである。愍傷衆生とは、衆生を見て愍み傷むことで、大悲のことである。大悲は大慈ともである。

慈という文字について思います語は、慈雨という語である。万物が旱天によつて命たえだえになつてゐる時、恵みの雨が降つた時、その一切を蘇らす雨を慈雨と言われる。ひいて、慈光と言い、慈父と言い、やがて慈恩という。みな大きな慈愛を思わないではいられぬ。一切のものは、この慈光の中で育てられてゆくのである。だから『過度人道經』(無量寿經の異訳)には、「聞我名字、莫不慈心歡喜踊躍」とあり、慈心こそは、歡喜踊躍の本源である。

『大智度論』の卷第二十七、大慈大悲義には、

「大慈大悲名為一切佛法之根本」

と説かれてあり、その大慈大悲を釈して、次の如く説かれる。

「大慈与一切衆生樂。大悲拔一切衆生苦。大慈以喜樂因縁与衆生。大悲以離苦因縁与衆生。」

(読み方。大慈は一切衆生に樂を与え、大悲は一切衆生の苦を抜く。大慈は、喜樂の因縁をもつて衆生に与え、大悲は離苦の因縁をもつて衆生に与う。)

衆生に樂が与えてやりたい。与樂が大慈であり、苦が抜いてやりたい、抜苦が大悲である。そしてまた、喜樂の因縁を与えてやりたい。それが慈であり、苦しみを離れる因縁を与えてやりたい。それが悲である。この因縁の成就、慈悲は、ありがたい因縁の成就にある。物や金は与えられても、それだけになりやすい。全体としての因縁を成就する、それは至難なことだ。因縁を受け取る時、自然に全体としての果報が、衆生の上にある。

菩薩は「未だ曾て慢恣せず。」と言われる。慢という字は「おこたる」「あなどる」「おごる」という義の字である。怠慢、僣慢、慢恣と熟字になる。怠慢おこたるものは、僣慢であり、やがて縦恣ほしさまである。菩薩は、おこたらず、たかあがりしてあなどらず、ほしいままでないのである。

他を抱いて、己の中に他を見ようとする大慈、他の苦しみの中に、己を見る大悲の心、それはけつして怠慢にして僣慢であり、自らの五欲煩惱をほしいままにおし通そ

うとする者の心からは生まれえない。それだから、「愆傷衆生」の菩薩は、「未曾慢恣」なのである。

自らの我を通して五欲のみにほしいままなる者は、けつして傷むべき衆生を見出しはしない。

傲慢な心は、自分の相さえ知らない。他の者はみな馬鹿に見え、自分だけは賢く見え、そのくせ悪い事は他にぬすりつけ、善い事は自分の手柄にする。慈悲なき心である。大悲同感などあろうはずがない。

それだから、「未だ曾て慢恣せず、衆生を愆傷す」との徳を、普賢菩薩の徳と言われる。普賢の徳を、曇鸞大師は、易の「劳謙」と論語の「善讓」の説をとって、「劳謙善讓」の語をもって表わされた。

「子曰く、劳ありて伐<sup>ほ</sup>せず、功ありて徳とせず。厚の至り也。謙は其の功をもつて人に下る者なり。」

「人を先にし、己を後にす、之れを讓と謂ふ。」

骨を折つてもほこらず、功があつても自分の徳としないで、功があるほど下り、喜樂の果を人に讓る。「未だ曾て慢恣せず。」この人のことである。

この普賢菩薩の徳に生きる人が「衆生を愆傷す」るのである。

名号はこの大悲によつて生まれた大善大功德であり、大慈悲に充滿して、信一念を通して衆生に廻向せられる、慈心歡喜。懺悔業障。うべなるかな。